

杉山●それでは、これから三つのパネルディスジョンをはじめたいと思います。はじめに、「海外から見た日本文化とアーティスト・イン・レジデンス事業」をテーマに、3人の方にお話をいただきます。エマニュエル・ワンバックさん、クリスチャン・メルリオさん、若杉聖子さんです。

当初はメキシコ出身の作家、ファン・パブロさんにお願いしておりましたがご都合がつかず、急きょエマニュエルさんにお願いすることになりました。モデレーターは陶芸の森の安藤祐輝が担当します。

### パネル・ディスカッション1 「海外から見た日本文化とアーティスト・イン・レジデンス事業」

#### ◇パネリスト

エマニュエル・ワンバック（陶芸家／アメリカ）

クリスチャン・メルリオ（ヴィラ九条山館長／フランス）

若杉聖子（陶芸家、フランスのリモージュのAIRを経験／兵庫県）

#### ◇モデレーター

安藤祐輝（陶芸の森創作研修課 レジデンス事業担当指導員）

安藤●陶芸の森創作研修課の安藤です。アーティスト・イン・レジデンス（略称AIR=エア）というシステムが欧米で登場したのが1950年から1960年頃だとされています。これに先駆け、日本では1980年代から1990年代にかけて、さまざまな形態のアーティスト・イン・レジデンス事業が展開されました。1990年に開設したこの滋賀県立陶芸の森も、1992年からレジデンス事業を開始しています。

AIRという言葉が誕生したのはそういう時期ですが、アーティストが異国や異文化のもとで制作活動をすることは、それまでにも行なわれていました。それだけのメリットがあるからです。作家が外に出て活動するメリットの一つに、先ほど野田先生がおっしゃったように、異文化との交流を経験することで作家活動が広がることが挙げられます。

では、AIRを利用して海外から日本にきたアーティストにとって、日本にはどういうメリットがあるのでしょうか。どのような期待をもって日本でAIRを行なっているのでしょうか。あるいは、世界のAIRと比較して、日本のAIRはどのような見方をされているのかをお聞きしたいと思います。

では、3人のパネリストを紹介させていただきます。陶芸の森のAIRにアメリカから参加され、現在スタジオ・アーティストとして研修館で制作されているエマニュエル・ワンバックさん。京都にあるAIR施設、ヴィラ九条山の館長をされているクリスチャン・メルリオさん。2000年に陶芸の森でAIRを体験し、先日までフランスのリモージュでAIRをされていた若杉聖子さんです。この3人の方からお話を聞きし、その後私からいくつか質問させていただきます。では、エマニュエル・ワンバックさんにお願いします。

刺激的な経験のはかりしない価値  
エマニュエル・ワンバック（陶芸家／アメリカ）

このような場でお話しできることを、たいへん光栄に存じます。日本でのAIRは私にはとても重要な経験でした。私は11年ほど前に陶芸を始めました。それ以降、陶芸のレクチャーを受けるたびに、日本の話が出ないことはありませんでした。茶道についてであったり、それにまつわる「わび・さび」であったり、日本の陶芸で一般的な天然の土であったりです。ですから、最初にAIRをするのは日本で、と考えていました。

1950年までのアメリカは陶芸にあまり親しみがなく、作品といえるものは博物館で目に見るくらいのものだったと思います。しかし、アーチブレイ財団(Archie Bray Foundation)が設立されることで、関心はどんどん広まったといわれています。この財団が最初に招へいした日本人アーティストが、濱田庄司さんでした。〈資料4～5〉彼は民芸理論の考えを広め、天然の土を使うことや、インパーカクション（未完）であることについての観念を導入しました。

AIRの興味深い点は、複数の文化が交わることで、作品に複数の文化の融合がみられることがあります。バーナード・リーチの作品〈資料6・7〉にも、西洋的な要素のなかに日本的な要素に織りこまれています。そのような美しい融合が、AIRの魅力だと思います。

このアーチブレイ財団でAIRをしたアーティストのほとんどが、濱田庄司さんこそが陶芸の祖であると考えていました。ですから、私も日本でAIRをしたいと思いました。

この陶芸の森にきたアーティストで、私がとくに強い影響を受けた一人がピーター・ヴォーコス（Peter Voulkos）氏です。巨大な壺（ベッセル）を薪窯で焼いています。〈資料8・9〉たいへん抽象的な作品ですが、この作品にも民芸理論の大きな影響を見ることがあります。

ポール・ソルドナー氏（Paul Soldner）の作品は自然な表情をよく使っていて、彼はアメリカの楽焼の祖と考えられています。〈資料10～12〉日本滞在中に楽焼を学んで彼なりの楽焼のスタイルをつくり、これがいま、アメリカの楽焼のスタイルのベースとなっています。

ピーター・カラス氏（Peter Callas）です。〈資料13〉彼はアメリカに穴窯と薪窯を紹介した人です。彼の作品をご覧いただくと、信楽焼との共通性をみていただけます。〈資料14・15〉

つぎに、私が信楽でAIRをはじめる以前の作品を見ていただきます。〈資料16～20〉ご覧のように、先ほどご紹介したアーティストたちから強い影響を受けています。薪窯を使い、くわえて私のアイデアで人形のフィギュアのようなものを作ったりしています。

私はいろいろな作品を作りました。しかし、自信をもって「これだ」と言える作品を制作するには、もっと時間を割き、集中して取り組む必要があると考えました。私が尊敬するアーティストが滞在した信楽に来ることで、私もよい作品をつくれるのではないかと思ったのです。

AIRの場を選択するにあたっては、やはり国際的なところがよいと考えました。世界各地から人が集まっている環境がよいと考えたのです。信楽は現在も、メキシコ、オーストラリア、韓国、香港、日本など、多くの国や地域からすばらしいアーティストがたくさんきています。〈資料20〉なかでも、興味深いのは陶芸家にいたる道程が異なることです。それぞれが異なるバックグラウンドを持って信楽に来られているのです。

信楽にくるまえの私は、信楽でのほとんどの時間はスタジオで過ごすのだろうと思っていました。しかし、スタッフのサポートもあって、いろいろなところに連れだしていただき、期待を上回ることばかりでした。〈資料 22〉陶器が社会や暮らしの大きな部分を占める日本という社会で過ごすことのすばらしさにも気づきました。

私が信楽でつくった作品でベストなものが〈資料 23〉だと思っています。陶芸の森に到着して初日に見た作品にとても感銘を受けて、大きな壺をつくりたいと思ったのです。作品の右側には、あえてすこしダメージを与えていました。自分のアイデアと日本で気づいたことから、私独自のものをつくりだしたいと今も取り組んでいます。

陶芸の森では、周囲から強いサポートを受けています。思いどおりにならなくても、みなさんのサポートで、つづけて取り組む意欲が生まれます。それはかつての制作活動ではあまり感じなかったことです。

私は日本の風景にインスピレーションを受けて、それを作りに活かしています。たとえば、京都で浴衣を着たときの生地の模様がとても気に入ったので、こういうかたちで作品に取り入れてみました〈資料 25〉。瀬戸の博物館で見たイメージからヒントを得た作品もあります。〈資料 27〉は日本の五重塔からインスピレーションを受けてつくったものです。そういう日本で見たものから素材を得ています。そのように、この AIR を取り巻くすばらしい自然に私は大きな影響を受けているのです。

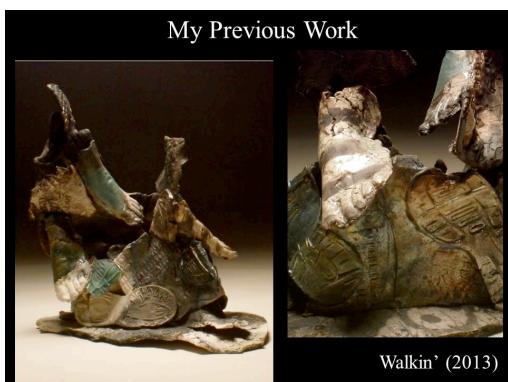
私は花がとても好きです。日本の花は、アメリカの花とは種類が若干ちがいます。公園を歩いているだけできまざまな新しいインスピレーションを花から受けて、自分の作品に活かしています。都会で AIR を行なっている友人たちとも違います。まして、アメリカでは花からインスピレーションを受けることはありませんでした。

日本は陶芸にたいする理解がたいへん深い国です。陶芸を重要視している国です。信楽の AIR ではサポートも受けられるし、多様な設備も提供していただけます。アートがしっかりと認識・評価されている国に来たことの意義は、ずいぶん大きいと思います。

私が信楽を AIR に選んだことは、たいへん重要な選択でした。アーティストが、若い時期にこういう経験を積むことは稀だと思います。それだけに、私にはとても貴重な経験となりました。ありがとうございました。



〈資料 1〉

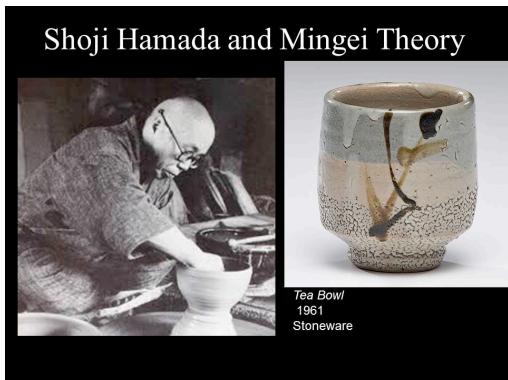


〈資料 2〉



Soetsu Yanagi, Bernard Leach, Rudy Autio, Peter Voulkos, Shoji Hamada at Archie Bray 1952

〈資料 3〉



〈資料 4〉



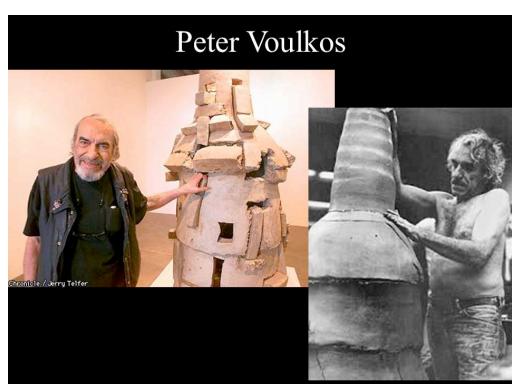
〈資料 5〉



〈資料 6〉



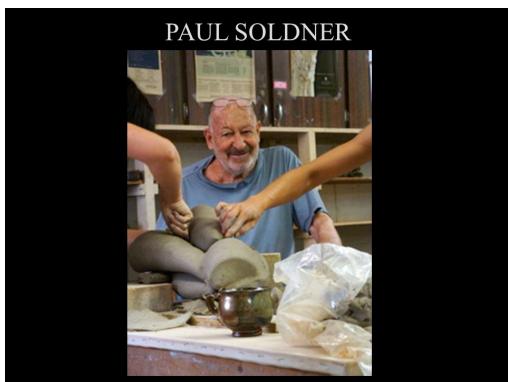
〈資料 7〉



〈資料 8〉



〈資料 9〉



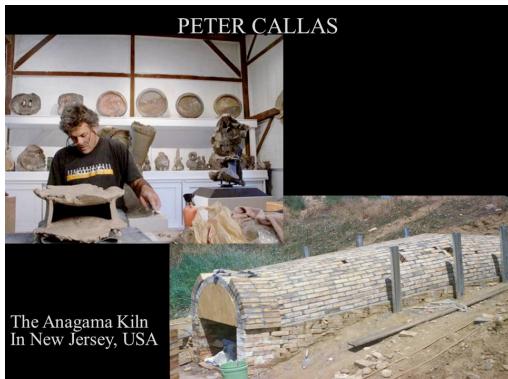
〈資料 10〉



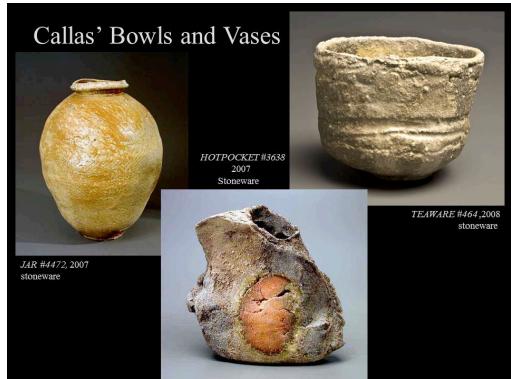
〈資料 11〉



〈資料 12〉



〈資料 13〉



〈資料 14〉



〈資料 15〉



〈資料 16〉



〈資料 17〉



Face In Blue (2014)

〈資料 18〉



Cupped (2015)

〈資料 19〉



Grip (2015)

〈資料 20〉

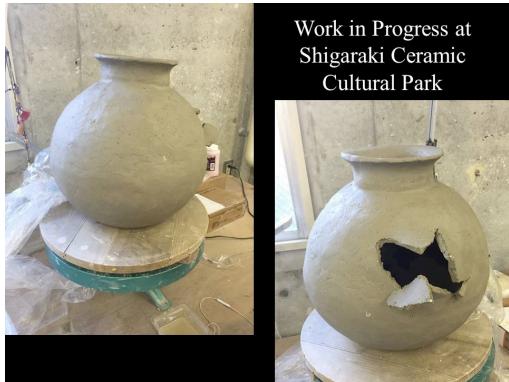


〈資料 21〉

国際シンポジウム「関西アーティスト・イン・レジデンス in 信楽」  
パネル・ディスカッション 1



〈資料 22〉



〈資料 23〉



〈資料 24〉



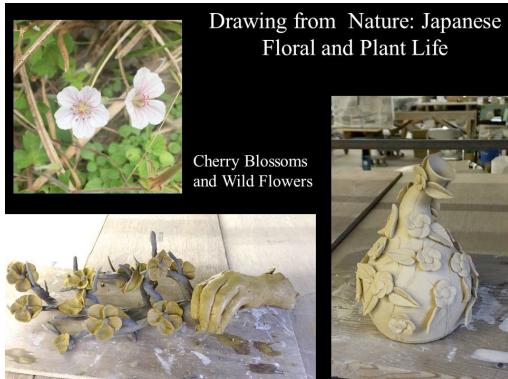
〈資料 25〉



〈資料 26〉



〈資料 27〉



〈資料 28〉



〈資料 29〉



〈資料 30〉



〈資料 31〉



〈資料 32〉



Trees, Roots, and  
Branches

〈資料 33〉



〈資料 34〉